

タイトル	私とは何か：「個人」から「分人」へ				
著者名	平野啓一郎	出版者	講談社	発行年	2012
請求記号	081K 2432 v.2172 A	資料ID	1131185		

✿先生からの推薦資料紹介✿

「イメチェン」「キャラ」「〇〇デビュー」「八方美人」「仮面」
「本物の自分／ウソの自分」「自分探し」「自分が好きになれない」
「愛とは?」「私って何者?」など----

こうした日常でよく耳にする言葉がはらむ固定観念を浮き彫りにしながら、そこから生じる人間関係や自分自身にかんする悩みにたいして、「分人 (dividual)」という「個人よりも一回り小さな単位」を導入することでアプローチしたのが、小説家の平野啓一郎 (1975-) である。

人には対人関係ごとに異なる複数の自分があることは考えられてきたが、それはどちらかといえば否定的に捉えられてきたと思われる。それにたいし、平野は日本に明治以降入ってきた西欧由来の「個人 (individual)」という概念の語源に立ち返りながら、人間を「分けられる」存在として捉え直す。一人の人間は、対人関係ごとの複数の自分、例えば職場での分人、恋人との分人、両親との分人・・・というネットワークからなる存在なのだ。目の前の相手を思いやって、その相手に合わせた分人を形成すること、それが円滑なコミュニケーションを築く秘訣であると述べられている。

平野は小説家として近年の一連の創作活動 (『ドーン』『空白を満たしなさい』など) をとおして、自己のアイデンティティや自己と他者の関係性といった私をめぐる様々な問いに向きあいつづけている。

本書は、こうした平野作品にかんする格好の読書案内でもある。平野が分人主義という立場から読む世界文学案内としても興味深い。個人的に、平野作品の魅力は読み応えにあると思う。

現代の社会問題だけでなく、家族、愛、死、ロボット技術の問題、さらには古典的な文学モチーフや引用も盛り込まれており、読後はすっきりとはしない心地よい疲労感にいつまでも浸ることができる。知りたいことに答えを与えてくれる一文にも出会えることも多い。

自分を肯定したくてもできない人、自分のことを少しでも好きになりたい人、自分のことを知りたい人をはじめ多くの人に、本書をとおして新たな経験をしてもらいたい。

